

会報

〒183-8534
 東京都府中市朝日町3-11-1
 東京外国語大学
 ロシア語渡辺研究室内
 東京外語ロシア会
 TEL & FAX 042-330-5265
 振替口座 00110-8-22338

図書館・レーニ・露語有情

方波見雅夫



もう六十年以上も前のこと、母校は麹町区竹平町のお濠端の一角にあった。這いつくばるように立ち並んだバラック校舎群の奥に蹲るようにして木造平屋の図書館があった。閲覧室の窓から隣り合わせのグラウンドが見え、そこではしょっちゅう軍事教練が行われていた。私は号令一つで人間を操り人形のように動かすこの軍事教練が苦手で、いつもサボって図書館に逃げ込んでいた。中学時代から歴史が好きだったので、図書館では主にロシア帝政時代に

出された史書の古典を読んだ。読むと言うより眺めたと言う方が正しいのだが、ロシア史の原本に接するのが何となく愉しかった。本に飽きると息抜きに面白そうな雑誌類を探して、たまたま「ニワ」という絵入りの週刊誌を見付けた。やや薄手で表紙には古代ギリシャの女神像が描かれていて、軽い文芸作品と時事問題が主内容だったようだ。ページをバラバラめくっていると、ページの下端にはぽっかりと一つ大きな穴があつて、ほぼ十センチ角の空欄のど真ん中に入つたと一語「レーニ」という文字が目に入った。そこは当時の有名人らしい二十数名に宛てたアンケート調査の特集であった。質問要旨は「今のロシアに生きるうえで貴方にとって何が一番大切と思われるか」で、これに対して回答者の多くは、おそろく制限字数いっぱい回答を寄せてい

府中だより	鈴木義一	2
大学から	亀山郁夫	2
東京外語ロシア会会計報告		3
「原卓を語る」二〇〇五年ロシア会から		4
語劇「ワーニャおじさん」(二〇〇五年)		6
ロシア作「初恋」(二〇〇六年)		6
日本とロシアの「お笑い」観 成海志乃		7
ロシア会総会・懇親会のお知らせ		8

るように見られた。そうしたなかで一人だけが「レーニ」と一語ぶつきらぼうに答えているのが目立っていたわけだ。回答者はなんとイワン・セルゲイヴィッチ・トゥルゲエフであった。

「レーニ」は辞書を引くと「怠ける・何もしないこと」だそうだ。私が軍事教練をサボって図書館に隠もり「小人閑居シテ不善ヲ為ス」のどこか似ていると思ひ、不善の行為の後ろめたさをひそかにカモフラージュした。

私は訳本で「猿人日記」「ルージン」「父と子」等を読んでいたし、それらに見られるトゥルゲエフの偏らない思考や上品な作風を好んでいたのだ。「レーニ」の裏の意味に関心を持った。これはおそらくニコライ一世時代の軍国主義の高まりの中でロシア知識人がひとしく味わっていたであろう息苦しから洩れ出た「レーニ」じゃないだろうか。トゥルゲエフは「猿人日記」でも地主達によつて、ひどく粗末に扱われている農奴の「いのち」に涙している。いつの時代も人間にとって一番大切なのは、「いのち」そのものである。

軍国主義の世の中で知識人や庶民が大切な「いのち」を守るためには、まず目立たないこと、鳴かず飛ばずに身を伏せて嵐の過ぎるのを待つ知恵が大切、誰も鳴かずば撃たれまいの処世訓を心に留めて生きることが肝要、とトゥルゲエフは考えたのではないだろうか。余談ながらトゥルゲエフについての松田衛先生(ロシア語講読担当)の述べが思い出される——「僕は二葉亭四迷の直弟子だが、あの先輩はトゥルゲエフが好きで、作品を舐めるように読んでいた」と。心に残る言葉だった。

私は図書館での閑居・不善がつもり積もつて、軍事教練不合格の烙印を押された。これじゃ卒業も危なっかしい。軍事教官の発言力の強大さは時節柄容易に知ることができた。私を卒業させて下さったのは、語部主任教授の松田衛先生であった。日頃は洪面の怖い先生であったが、心の温かい学生思いの方であった。卒業させて下さっただけでなく、他に二名の級友と共に不肖の私を参謀本部に送り込んでくださったのである。二名の級友は私などよりずっと優秀であったが、教練不合格の私は、もし召集令状でも来て軍隊に取られたら悲劇そのものである。それを見越して松田先生は兵役回避の公算の高い参謀本部に送り込んだのであろう。いわば命の恩人でもある。

松田先生が戦後ガンを患ひ、死の床からかつての教え子達に出された「訣

別の書翰」がいま私の手許にもある。教え子の多くが敗戦で職を失い意気銷沈の底にあるのを氣遣い、出された励ましの手紙である。「時運めぐり来たつて諸君が再び露語の知識を活用して国家、社会に貢献する時機の到来せんことをひそかに念じております」と結ばれ、墨字で松田衛と大きく自署されている。文中御自作の七言絶句の漢詩が添えられ、死を前にして松田先生の氣骨稜稜の氣迫に胸打たれる。

いま私は松田先生より更に十年の歳月を重ねて苦むす古瓦になってしまった。「老人幽居、為瓦全」の状態であるが、かつて外語で机を並べた懐かしい仲間達、札幌で共に過ごした同窓諸兄との「露語有情」の日々を心から懐かしむ此の頃である。

授

(昭和16年卒業・札幌学院大学名誉教授)

府中だより

鈴木 義一

東京外国語大学が「国立大学法人」となつてから今年で三年目になります。法人化に際して掲げた六年間の「中期目標」も折り返し点を迎え、学内では「点検評価」をめぐる議論で騒がしくなっています。十八歳人口の減少とい

う社会的状況も加わり、国立大学でも「目立つ」成果が求められるようになりました。こうした変化は、文部科学省の予算配分ともかかわっており、研究予算のみならず教育面でも「成果」に応じた重点的な予算配分を行うようになっていきます。「競争的環境」を作り出すために、教育改革の「優れた取組」をG.P.(Good Practice)と称して予算配分するようになりました。幸いにして外語大は、この「特色G.P」と「現代G.P」なるものにそれぞれ二件ずつ採択されています。また、学長特別補佐の亀山郁夫教授の企画により、「TUFFSオープンアカデミー」という市民むけの公開講座が始まります。全国の八八の国立大学の中で、予算、人員の面では中小企業の規模ですが、外語大はなんとか「目立つ」存在に食い込んでいます。以下、昨年一〇月以降のロシア科(ロシア語専攻)に関連するおもな行事を順に紹介します。

昨年一〇月二五日には、すでに恒例となつた第三回「ロシア語週間」の環境として講演と朗読劇が行われました。モスクワ大学のオリガ・コロトコワ助教授の講演に続き、オレグ・バラモノフ氏が「二〇世紀のロシアの恋愛抒情詩」と題して朗読を行いました。詩の朗読はもちろん、一年生・二年生を相手に詩の内容を熱く語る(もちろんロシア語だけで)様子からも、全ロシア最優秀教師コンクール優勝者のパウ

が感じられました。

外語祭でのロシア語劇については、出演した学生の記事を参照下さい。実は、冒頭に書いた「特色G.P.(特色ある大学教育プログラム)」の一つとして採択されたのが、「生きた言語習得のための二六言語・語劇支援」です。これが採択されたために「マルチメディアホール」に舞台用の照明設備等が設置され、今回からすべての語劇がここ(三〇〇名収容の教室)で上演されるようになりました。

二月一三日には、すでに一〇回目となつた「中野健三基金シンポジウム」が「中央アジアにおける体制転換の諸相」と題して開催されました。ゲストにはアジア開発銀行タジキスタン駐在事務所前所長の本村和子氏(論題は「タジキスタンの安定と発展への挑戦」と和光大学講師の坂井弘紀氏(論題は「カラカルバク口承文芸の現在」)を招きました。最近では、中央アジア地域にとくに関心を持つ学生が増えています。なお、坂井弘紀氏は本学モンゴル語科卒業です。

二日には、日本ユーラシア協会の協力を得て、エドワード・ウスペンスキー氏の講演会を開催しました。同氏は、ソ連アニメ等でおなじみの「チェブラーシカ」の原作者で、当日は本学の学生はもとより、学外からも多数のチェブラーシカ・ファンが集まり、会場の教室には立ち見が出る盛況でした。

「競争的経費」の「成果」を示す数字がひたすら追求されるようになった結果、いったい誰が読むのだろうかと思われる大部の「成果報告書」が学内外で次々と刊行されるようになりました。ロシア語専攻では、量は少なくとも質のよいものをめざしたいものです。(東京外国語大学助教)

大学から

「国際教育支援基金」募金
事業への協力をお願いします。

亀山 郁夫

今年に入つて五月一日には、やはり「語劇支援」の「特色G.P」による特別講演会が開催され、作家の島田雅彦氏が「演じながら考える」と題して、自らが在学中に語劇の演出を行った経験をふまえて講演を行いました。六月

本年九月一日、東京外国語大学は、国際教育支援基金の募金事業を開始しました。これは、言語や文化的な背景の違いをこえ本キャンパスに学ぶ優れた学生(日本人学生、留学生)に対し奨学金支給、海外派遣などの幅広い支(次ページ4段目につづく)

会計から

ロシア会の会費は、外語会の会費とは別立てになっており、つぎの通りです。

終身会費

三万円(振込料 一〇〇円) または年会費

二万円(振込料 七〇円)

納入頂いた状況は左表の通りで、前年度に比べ年会費を納入された方は二十三名増加しましたが、終身会費を納入された方は五名減少しました。この結果、前年比七万円余の減収となりました。一方、懇親会の案内を会報で行うことが出来ましたので、懇親会案内費

が不要となり、収支全体としては二年続いて赤字を計上することができました。毎度お願いしておりますように、会の活動基盤強化のため、引き続きご支援、特に終身会費納入によるご支援をお願い申し上げます。

尚、懇親会については、先輩と後輩の交流を図る機会として学生は無料にしようという旧ロシア会 八杉先生以来の伝統を継承し、例年、本会計より補助を行っております。

(追伸) 会報送付の封筒の宛名頭部に○印のある方は終身会費納入済みの方なので払込票は同封してありません。

東京外語ロシア会2005年度収支

(2005年4月1日～2006年3月31日 単位 円、監査実施済)

1 収入	終身会費 (20名、単価3万円)	600,000
	年会費 (延べ85名、単価2千円)	170,000
	寄付金 (1名 5万円)	50,000
	利息	145
	合計	820,145
注：年会費には1千,3千,4千,5千,6千,1万円納入者あり		
2 支出	会報制作費 (印刷製本作業代)	147,380
	会報宛名ラベル (支払先:外語会)	15,000
	会報郵送費	143,120
	郵便費 (早川氏原稿)	660
	払込票への印字費 (支払先:郵便局)	1,600
	会議費 (04年12月及び05年8月)	18,704
	会議会場費 (サテライト使用料)	3,000
	雑費 (払込手数料3件)	1,050
	懇親会への補助	250,775
	合計	581,289
3 差引計算及び繰越金		
	差引剰余金	238,856
	前期繰越金	3,612,517
	次期繰越金	3,851,373

ロシア会懇親会収支 (2005年11月19日実施、単位 円)

1収入	出席者会費 (卒業生44名 単価5千円)	220,000
	本会計からの補助	250,775
	合計	470,775
2支出	料理代 (外語大生協)	400,000
	飲物代 (大久保商店)	70,055
	払込手数料 (2件)	720
	合計	470,775

二〇〇五年度 終身会費納入者

(納入日付順・敬称略)

- 若谷志麻子、岩城美里、佐藤純一、水野正俊、鈴木玄機、小町谷祐子、小澤安尚、矢澤和代、石原好司、吉成大志、有田美枝、浅野好春、松本園彩、吉田臣吾、蛭子礼子、田畑武也、宮島進、佐藤ゆき子、匿名希望一名
- 合計二十名
- 終身会費とは別に、吉成大志氏より寄付金を頂きました。

ロシア会会計

池田英友 大浩義之

(前ページからつづく)

援事業を行い、地球社会の平和と発展に広く貢献できる国際人の養成をねらいとするものです。独立百周年記念事業の際にはロシア会の皆さまからも絶大なご支援を頂きました。今改めて感謝申し上げると同時に、地球社会化時代に新たに船出しようとする本学の今後の発展と、国立法人化時代の「外語」のサバイバルのため、どうか新たなご支援を賜れましたら幸いです。募金要領など、詳しくは、本学のホームページをご覧ください。

東京外国語大学オーブンアカデミー開校のお知らせ

本年十月より、本学の卒業生、社会人を対象としたコミュニティ・カレッジが開校されました。計30タイトルの新規の講座が用意されており、講義は主として、文京区にある本郷サテライトにおいて行われます。同窓生たちとの新たな出合いの場となることを切に祈ります。講座によって開講時期は異なりますので、本学のホームページでご確認ください。なお、ロシア関係では、亀山郁夫「ドストエフスキーと対話する」(6回)、渡邊雅司「ユーラシア文化を考える」(4回)が十二月から用意されます。

(昭47・東京外国語大学教授、学長特別補佐)

——原卓也先生が亡くなられてもう二年。昨年のロシア会の「原卓を語る会」で話されたお三方にあらためて寄稿頂きました——

原卓也ーわが心の故郷

平野 裕

私の心にははっきりと穴が空いた。彼はいつも私たちロシア語生の心の中に生きていた。難解な単語に「原ならどう訳すかな?」とよく考えたものだ。母校の学長を生んだ同期の誇りも今となつては恨めしい。

敗戦直後の大学生時代。革命が今にも起ころうな日々。学内集会に明け暮れたキャンパスで彼は社交ダンス同好会を始めた。「スターリンと左翼運動」しか頭に無かった学生にはその明るい光景が鮮烈で、ロシア語科のイメーヂを大きく変えた。二年遅れて大学が初めて迎えた女子学生には語劇の特訓。女性にはいつももてた。チエホフ一幕物の軽喜劇「披露宴」で「ゴリリカ」の声に女子学生と抱擁して照れる彼の花婿姿が昨日のようだ。

一九六五年暮れだった。モスクワ特派員に着任早々の私は彼に誘われ、一夜、ゴリキー(現トヴェリ)通りで遊んだ。ソ連の新世代作家としてすでに名をなしていたV・アクシヨノフらが一緒だった。街頭で突然「レチカー・ドヴィジュツァー・イ・ニエ・

ドヴィジュツァー」と歌う彼の後ろ姿その足元から一筋の水が流れ出すのが見えてロシア人たちは大笑い。「彼はロシア語がうまいよ」とアクシヨノフは唸っていた。

やがて、彼はソ連の若い作家たちが次第に反体制的な立場に変わって行くのを見て、亡命作家や反体制作品に関心を向けた。その頃、訪日した有名な日本研究家リユボーワさんが「原さんはナイヴなのよ」と顔を曇らせたのを覚えている。再度のモスクワ勤務を終えて毎日の外信部長になった私を講師に招んでくれた。高田馬場の喫茶店で新田実、故志水速雄両教授も同席、銀座に出て飲んだ。一年しかご好意にお応えできなかったが、受講生に朝日現特派員の大野正美君(昭55)もいた。話は飛んで一九九三年。退社直後の私は、新宿の同窓会で彼の話を知らうちに、文部省の日本語講師派遣プログラムでロシアに行くかとロマンチックな気分になった。一夜明けて「私はどうなるのよ」と家内に言われオジャムで笑っていた。五年前、熱海の同窓会が最後の同期生会。学長を辞めた後、その過労で満身創痍。皆の心配をよそに彼は最後まで座に残って、陽気にはしゃいで飲んだ。風呂場で倒れて大騒

ぎになりながら三十分後にはまた座敷に現れ皆をびっくりさせた。

不世出のロシア語翻訳家の気取りは仲間内でも決して見せなかった。常にフレッシュな感性をもち、友人には優しく、サービスピ精神に富んでいた。ロシア語生に特有の生き方だと思ふ。最近亡くなった通訳家で作家の米原万里さん(昭50)もそうだった。私は夢をもっていた。私を中心メンバーの一人である日本翻訳家協会の理事長に彼を迎えたかった。学長辞任後、理事になられたが、時間は尽きた。J・ケナン「シベリア流刑制度」の畢生の完訳を成し遂げた故左近毅教授(昭37)の同協会賞受賞を推薦したのは彼である。(昭和28年卒)

原卓也先生の思い出

安岡 治子

原先生が亡くなって、もう二年近くになる。わからないことがあれば何でも教えて下さり、色々ご相談できた先生はもういらっしやらない…。「当たり前だろう。お前、いくつになつたと思ってるんだ」という原先生の懐かしいお声が聞こえてくるようだけれど、寂しさ、心細さはどうすることもできない。

私は、学部は上智へ行ったので、原先生の授業を初めて受けたのは、大学

院に入ってからだった。ベルジャエフの「ロシア理念」やクリュチエフスキーも読んでくださったのではなかったか。いずれにしても、ロシア民族と文化の精神的基盤をわかり易く解き明かす講義であった。

授業以外で最も思い出深いのは、来日する作家たちとの交流に、私たち院生も参加させてくださったことである。当時、ソヴィエト作家同盟のお墨付きで来日するのは、多くはゴリゴリの共産党員で、ソルジェニーツインの翻訳者である原先生を、初めのうちはもの凄いい形相で睨み付けたりする人もいたが、奥様お手作りの山海の珍珠とお酒、そして何よりも先生の細やかでありながら大らかな、時として抜群のユーモアのセンスに溢れた魅力的なお人柄に打たれて、忽ち打ち解け、思わず純朴な面を見せたりしたものだ。

私が曲りなりに、いくつかのロシアの作品を翻訳できるようにしたのは、原先生のお蔭というしかない。まだ何も翻訳したことのない私に、ワレンチン・ラスプーチンの「生きよそして記憶せよ」を共訳しよう、と声をかけてくださったのだが、これは、今思えば、大変な教育的配慮であった。まだロシア語もあまり良くできず、翻訳の何たるかをまるで知らない院生の訳文に手を入れることは、非常に手間隙のかかる作業であり、最初から自分で訳した方がよほど楽に決まっている。特に第一章は、さすがの原先生も「これは大変だ」と、後悔なさつたの

ではないか。その時、翻訳とは、露文和訳の試験の解答とは根本的に異なるものであることを縷々教えてくださった。そこで心を入れ替えた私は、一章以降は思い切った意識なども出来るようになり、恩知らずにも、この共訳作業では、それほど先生にご迷惑をおかけしないで済んだのではないか、(もつとも、「おまえは、ラヴシーンになると、極端な誤訳があるな」と先生を呆れさせた箇所もあるが) などと思ひ込んでいた。

しかし、先生最後のご著書となった『わが心の中のロシア』のあるエッセイで、「原作の文体やリズムに対する自分なりの把握が出来て、それに対応する訳文の文体やリズムが作られると、あとは訳語がひとりてに生まれてくることが多い。…だから翻訳する際に、いつも私がひどく苦労するのは冒頭の一章である」という文章を発見したとき、あらためて自分の不明を深く恥じたものだ。

原先生は、二葉亭の言う「翻訳とは、原作者の文調と詩想をともに移さねばならない」をよく実践された名訳者であった。井伏鱒二氏は、九十歳を越えた晩年、もう創作はなさらなかつたが、それでも毎日、「好きな人の文章を原稿用紙に書き写すだけでも楽しい」とおっしゃっていた。「それは誰の文章ですか?」と問われて、「原卓也の訳したチェーホフ」と答えられた話を、原先生にお伝えすると、先生は照れくさそうに笑っていらした…。

今は、天国で、大親友の江川先生や思いがけぬほど早く先生の元に逝っておしまひになった奥様と共に、大好きなお酒を思う存分、楽しく酌み交わしていらつしやることと思う。心からご冥福をお祈りしたい。

(昭和56年大学院修士課程卒)

さりげなく—— 原卓也先生の思い出に

亀山 郁夫

原卓也先生が亡くなられてから、まゝ二年が過ぎようとしている。鮮明だったいくつもの思い出の風化は避けられず、心に残る言葉からは声が消え、面影からは時の刻印があやふやになる。あの、不思議なぬくもりのあるユーモアが、今の今にかけがえがない、と感じられるのは、ほくらを取り巻く社会の雰囲気あまりにせちがらくなつたためだろうか。二年前、雑誌『文学界』に小さな追悼文を寄せたとき、ほくは、先生とグロバリーゼーションの関わりについてこう書いたことがあった。インターネットも、eメールも知らなかつた先生は、「最後のロシア文人」だった、と。

ほくが、外語大のロシア学科に入ったのは、ひたすらドストエフスキーと原先生に憧れていたからだだった。宇都宮高校の生徒のほくにも、トルストイ、

シヨロホフの翻訳者として、現代ロシア文学の紹介者としての先生の名前は伝わってきた。だから、旧西ヶ原キャンパスでの最初のオリエンテーションの際、淡い地のジャケットを気軽にはおり、ひな壇の左端に腰をおろした先生を見たときに、ほくはしびれるような興奮を覚えた。四十年前の話である。だが、その甘い興奮も、その数ヶ月後に起こつた学園紛争の嵐で一瞬のうちに消し飛ばされてしまった。四年間、全関係の学生たちに取り巻かれる先生に対し、ひとり裏切り者のような後ろめたさにつきまとわれつづけた。けれど、先生は、そうしたほくの気持ちをも百も承知だったのか、どこまでもさりげなく、温かいユーモアで包んでくれた。先生は、どこまでも自信に満ちていた。

思えば、そうした先生とのほんとうの意味での対話が始まったのは、ここ一年である。最近ある出版社から、『カラマーゾフの兄弟』の翻訳依頼を受け、先生のお仕事をあらためて徹底的に読み込むことになった。ほくは、そこで意外な「事実」に突き当たった。さすが、天才的、と思わせるところが随所にある。だが、読みやすいと言われたいわゆる「原訳」が、必ずしもそうではないのだ。一言で言うなら、律儀であり、無駄がない。パラフレーズを避け、無骨な原文にどこまでも忠実であろうとする姿勢があり読みとれる。しかしともすると、その律儀さがあるとなつて、流れ、勢いがそがれ

てしまう。米川正夫訳のもつ圧倒的に音楽的な流動感、リズム感を、残念ながら、原訳に感じることがはむずかしい。ところが、そこにはまきれもなく、何かしら確実なもの、流れない美しさがあると感じられるのだ。それは何なのか、いまもほくには説明がつかない。過剰でも、不足でもない、実物大のドストエフスキー……。文は人なり、と言っけれど、翻訳も人なりである。お酒を飲めば、とめどなくユーモアがあふれ出てくる先生のこの、悲しくなるほどの律儀さに、ほくはもう一人の原先生に出会つたような気がする。

「かりに、原先生がご健在だったら、『カラマーゾフの兄弟』の翻訳の仕事、お引き受けになりましたか?」最近、友人からそんな思いがけない質問を受けて、大いにとまどつた。質問はむろんまったく嫌味なものではなかつた。ほくは即座に答えた。「それはありませんね。」「すると、原先生は、きつと、亀山さんの今度の仕事のために旅立たれたのかもしれないですね。その言葉を聞いたとたん、はっと胸をつかれるような思いがした。ほくは長いこと、「最後のロシア文人」の圧倒的な力を前に、先生とは反対の道を歩むことで自足していた。けれど、「ロシア文学者」になりたい、という気持ちは、それほど強かつたということだろうか。それにしても、この後ろめたさとは、何なのだろうか。

(昭和47年卒)



語劇 2005年

昨年度ロシア語科は語劇「ワニーヤおじさん」を上演いたしました。この物語は、夏のはじめ、ヴォイニーツキイ(ワニーヤおじさん)と姪のソニーヤの住む地主屋敷に、ソニーヤの父、教授セレブリヤコフとその後妻エレリーナがやって来たことから話は始まります。セレブリヤコフは都会での教授の職を退き、若く美しい妻を連れて田舎に戻ってきたのでした。この二人が戻ってきたことで、平和で規則的だった田舎での暮らしは大きく狂わされることになってしまいました。九月に入り、教授が今住んでいる田舎の領地を売りたいと言いだしたことからワニーヤの怒りが爆発します。けれども最後には、ワニーヤとソニーヤは運命が投げかけてくる数ある苦難を耐えしのび、やがて訪れ来る、素晴らしい光輝く世界に思いをはせながら生きていくことを選択するのです…

語劇では数年続けてのチェーホフの作品であったため、スタッフ一同緊張感を持って臨みました。とはいっても

の、配役が決まり練習にあたったのは十月になってから。実質一ヶ月半の練習期間でした。はじめのうちはせりふを覚えるのに苦心しながらも、よりよいものを作り上げようという意識のもと、授業の空き時間に集まっては各々練習を重ねてまいりました。本番ではご来場くださった皆さまから高い評価をしていただき、またクライマックスでは客席からのすすり泣く声が舞台上まで聞こえてきて、なんとも言えない、幸せな気持ちを噛みしめました。短い期間に集中して練習し、本番で最高の力を発揮する—良いか悪いかはさておき、ロシア語科の典型的特長であるように思えます。

最後になりましたが、せりふの発音、イントネーション面で指導してくださったガリーナ先生、そしてご来場くださったすべての方々にスタッフ一同謹んでお礼申し上げます。ありがとうございました。

(文責 福田知代)

「キャスト」

ワニーヤ：松山順
アーストロフ：榎原聖仁
ソニーヤ：福田知代
エレナ：酒向幸枝
セレブリヤコフ：浅羽俊介
マリーヤ：南條沙織
テレーギン：岡崎卓巳
マリーナ：曾根朋佳
下男：加瀬智洋

「スタッフ」

代表・舞台監督：佐久間翔
代表・演出：伊東奈里子

ロシア語劇 ことしは…

演目 「初恋」

(原作：ヴィクトル・ローゾフ)

上演するのは

東京外国語大学ロシア語科2年

日時 二〇〇六年11月26日(日)

16時40分開演

会場 東京外国語大学 研究講義棟内

一〇一番教室

アクセス：西武多摩川線多磨駅から徒歩約5分、または、京王線飛田給駅から京王バス 東京外国語大学前下車

あらずじ：近所の同級生に恋する主人公のスラーワは、大学受験を終え、結果を待っている。そこにスラーワの叔父叔母が集まって来る。そこに舞い込む合格の知らせ。

しかし、恋心が学問の道の妨げにすることを危惧する叔父叔母連中は、スラーワに対して干渉を強めていく…

(岡田亜子)

「かもめ」、「櫻の園」、「ワニーヤお

じさん」と昨年まで三年続いたチェーホフ劇、いずれも好評でした。ことしは新しい作品に挑戦すること、頑張ってください。楽しみにしています。(編集子)

ロシア語サークルのこと

伊東 奈里子

ロシア語科三年生の伊東です。昨年の語劇メンバーとロシア語に携わってまた何かおもしろいことをやりたいという思いから、今年の4月にロシア語サークルを立ち上げました。

ロシア人留学生やロシア語関連の仕事などをなさっている方々のインタビューやロシア関連コラム(イベント情報など)を載せたサークル通信の月2回の発行、留学生を交えてのベチエリンカ、サークルHPの運営などを行っています。

今後は、定期的なロシア映画鑑賞会やロシア語会話の勉強会の企画・開催、学内外のロシア関連団体の方との連携など、色々な方面の橋渡しとなれるよう、より一層発展していきたいと考えております。応援、よろしくお願います!

URL: <http://yabochko.web.fc2.com/>

日本とロシアの「お笑い」観

成海 志乃



アルハンゲリスコエにて

ロシア人の知り合いが日本に来たとき、私に次のような質問をした。「なぜ日本のバラエティ番組は、ゲームに負けた人に罰ゲームをさせる番組が多いのか？負けた人がかわいそうじゃないのか？」

私のロシア語スピーチはこのような出だしで始まった。よく考えてみると、たしかに日本には罰ゲーム形式の番組が多い。寿司ロシアン・レットであたった人がワザビ10倍入りの寿司を食べる、ゲームに負けた人は高級料理店の絶品料理を食べられない、という類の番組は数えきれないほどある。ロシア人の知り合いに質問を受けてから、日本とロシアのバラエティ番組はどう違うのかということを考えるようになった。この問題と密接に関わってくるのは日本とロシアの「お笑い」観である。お笑いにも何種類があるが、私は日常レベルのお笑いテレビの中のお

笑いとは異質のものだと考えている。そして日本ではその二種類のお笑いの差が特に顕著である気がしてならない。

日本とロシアのバラエティ番組を比べたときに、一番分かりやすい違いは「お笑い芸人」の存在の有無である。日本のお笑い芸人は、ロシアのテレビ番組でも見られるコメディアンのように、面白い話をしたりミニコントをやったりするだけでなく、いじめられ役を買って出るという役割もある。俳優は立てるがお笑い芸人はけなす、というのがバラエティ番組の基本である。どのようなリアクションで嫌がるかがお笑い芸人腕の見せ所であり、観客にうけると「おいしい役」ということになる。そして、お笑い芸人とはそういうものなのだと認識している我々日本人は、安心してその場面を見て笑うことが出来る。日常生活で友達がおかしいことを言ったからといって頭を叩く人はあまりいないが、テレビの中でお笑い芸人が同じ状況で頭を叩いたら「ツッコミ」と認識され、叩いたこと自体はクローズアップされない。それをロシア人が見たらいじめだと思ふ。もちろん日本人の中にも程度によってそれを不快だと思う人はいるはずだが、テレビの世界では許容されている。

さて、このような「いじめの要素」のある笑いを許容している日本人はひどいと言えるであろうか？お笑い芸人をかわいそうだと思わないのは悪いことなのか？ 私はそうは思わない。日本とロシアでは許容できるお笑いの種類が違うだけである。そして許容されるお笑いは、日常レベルとテレビの中では異なる。実際、私はロシア人からジョークで何かを言われて「なんて失礼なことを言うのか」と思うことがよくある。しかし、彼らが無礼だということではない。ロシアで許容されているお笑いが必要とも日本で許容されるわけではないということである。特に日本では外見に関することや個人的なことは、テレビの中ではお笑いとして許容されても、日常レベルではタブーとされる傾向がある。ロシア人はしばしば自らの国民性の悪い部分を笑いに取り込む。ロシアのアネクドットで描かれるロシア人は酒飲みであり、ロシア人が秩序を乱したり決まりを守らないことを面白おかしく話して笑ったりする。このような自虐的な笑いは、日本にはない。しかし私は好きである。

ロシア人と接する中で、彼らからの思いがけない質問が日本文化を深く知るきっかけになったりする。今までテレビ番組についてこれほど深く考えたことはなかった。しかし今

では日露両国のテレビ番組、特にバラエティ番組がどのように変化するか、とても興味深い。ともにアメリカ化して似通っていくのか、それとも独自に変化していくのか。これから注目していきたい。

(東京外国語大学大学院生)

スピーチコンテストで

好成绩の東外大生

筆者の成海志乃さんは第35回全国ロシア語コンクール(本年六月三日駐日ロシア連邦大使館ホールで行われた。主催 ロシア文化フェスティバル組織委員会、日本ユーラシア協会・東京ロシア語学院)で優勝しました。日本のお笑い番組について

Paranekar'evname. Ispetranin B. Dronnin がスピーチの題でした。堀口大樹さん(学部四年)が第二位に入っています。昨年のこのコンクールでは坂本翔一さん(学部四年)が優勝、渡辺十希さん(学部四年)と近藤涼子さん(院卒)が共に第二位でした。

そのほか、第15回創価大学創立者杯ロシア語スピーチコンテスト(昨年十一月二十三日)スタンダード部門で福田祥さん(学部四年)が優勝しています。

二〇〇六年度

ロシア会総会・懇親会のお知らせ

今年度のロシア会総会・懇親会を左記により開催します。一年に一度の集まりです。多数の方々のご参集をお待ちしています。

日時 11月25日(土)

午後一時から総会

一時半から講演会

会場 府中キャンパス研究講義棟一〇七番教室

講演 「最近のロシア・モスクワ事情」

講師 名越健郎氏(昭51卒)

時事通信社外信部長

(前モスクワ支局長)

司会 渡邊雅司氏

懇親会 三時から 大学会館一階食堂で

会費 五千円

当日は外語祭の期間中です。ロシア語劇はローソフ作「初恋」。
11月26日(日) 16時40分から一〇一教室で上演します。

ショスタコーヴィチ生誕百年記念シンポジウムと演奏の夕べ

今年、20世紀最大の作曲家と目されるドミートリー・ショスタコーヴィチ生誕百年の記念すべき年にあります。

日本および世界各地での記念行事が行われていますが、東京外国語大学でも、大学独立百周年の基金事業の一つとして、記念イベントを以下の要領で開催します。

日時 二〇〇六年十二月十八日

午後六時開場

会場 日比谷公会堂

パネリスト 井上道義(指揮者)、
R・タラスキン(批評家)、亀山郁夫(本学教授)、R・バートレット
ほか

演奏 ショスタコーヴィチ「ピアノ三重奏曲」第2番

入場無料 多数のご来場をお待ちしております。

編集後記

今年度ロシア会総会・懇親会のご案内をかねた会報をお届けします。

この一年で本当に残念だったことは米原万里さん(昭50)のご他界です。今夏、七夕の夜に、「米原万里さんを送る集い」が日本記者クラブプレスセンターホールでありました。新聞などでの予告はなかった集いでしたが、生前の幅広い活躍を物語るように、同時通訳、ロシア・ロシア文学関係の学者、テレビ・新聞など報道関係のジャーナリスト、作家の方々など、米原さんと仕事を共にした、親交のあった人たちが大勢会場狭しと集いました。大型スクリーンに米原さんの姿や、「わが心の旅」からの数場面が映され、何人もの方々が思い出を語られました。

昨年二月、東京外国語大学21世紀COEプログラム総合シンポジウムでの記念講演「国際化とグローバルゼーションのあいだ」(外語会報104号に収録)を思い出しています。あのように含蓄ある、興味深い話を聴くことも読むことも叶わぬことになったのは残念です。小説第二作目のプロットも既にあつたとのこと、さぞ、無念の思いがあたりだったことでしょう。心からご冥福をお祈りいたします。

(Y M 昭34)